会　告

二〇一七年度史学研究会大会および総会は、予定どおり一一月二日（木）午後一時より、京都大学国際科学イノベーション棟五階シンポジウムホールにて開催されました。

公開講演は、青山宏夫、横田冬彦の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終了いたしました。

近世日本における坤輿万国全図の広がり　青山　宏夫氏

近世日本における時間と空間――『節用集』をめぐって――　横田　冬彦氏

なお、大会に先立って開催された定例の理事会・評議員会および総会において、二〇一七年度会務報告が行われ、原案どおり承認されました。また、『史林』バックナンバーのリポジトリへの掲載につき、理事会・評議員会および総会において決定を行いました。本件につきましては、「『史林』バックナンバーのリポジトリ掲載に関するお知らせとお願い」をご参照ください。

二〇一七年度史学研究会大会講演要旨

近世日本における坤輿万国全図の広がり

青　山　宏　夫

坤輿万国全図は、近世日本で作製された多くの世界図の原拠となり、仏教系世界図と蘭学系世界図にならぶ世界図の主たる系統の一つマテオ＝リッチ系世界図の源流となったとされる。しかし、より新しい蘭学系世界図の出現後も、より古いマテオ＝リッチの世界図に基づく図が、なぜ、どのように普及したのか。この点について、マテオ＝リッチ系世界図という類型の見直しも含めて、検討する。

マテオ＝リッチが、一六〇二年に北京で漢字により刊行した坤輿万国全図（縦約一七〇cm、横約三八〇cm）を詳細にみると、二度の改訂があり、初版、第一次改訂版、第二次改訂版があったことがわかる（最後者のみ現存）。このうち日本に伝来したのは、その模写図一点と多くの増補模写図とが残る初版と、原刊本が現存する第二次改訂版である。近世日本では、これらの模写図や増補模写図と、刊行図とによって、坤輿万国全図は広がった。

模写図は、当時の所在地でみると、仙台周辺と伊勢国に多い。前者については仙台天文学統との関係が指摘されているが、後者については未検討であった。そこで、伊勢国に残る模写図を検討すると、以下のようになる。

現在まで、第二次改訂版の唯一の模写図とされてきた由良図（亀山市歴史博物館蔵）は、未発見の原刊本の模写図である。その由良図に稲垣定穀が校訂を加えた模写図が稲垣図（津市図書館蔵）で、その校訂に利用したのが、現在ともに未発見の尾張・本田図と津・浄明禅院図（いずれも初版増補模写図）である。また、その浄明禅院図を模写したのが、井田図（津市図書館蔵）である。明治末期まで松阪にあった原刊本（現、京都大学附属図書館蔵）はこれ

らの模写図と関係せず、模写図相互の関係で広がっていったことがわかる。

さて、井伊家旧蔵の榊原図（彦根城博物館蔵）は、箱裏書によれば、津軽藩医樋口道泉の所持した模写図からの模写であることがわかる。一方、榊原図には校訂の加筆が九箇所にあるが、そのうち七箇所までが一致するのが北陸図（北陸の某肝煎家蔵）である。これら三者は、同一の模写系統に属するといえる。

一方、原刊本からの直接の模写図として、前述の由良図のほかに、蜂須賀家旧蔵の模写図（徳島大学附属図書館蔵）を新たに確定した。このことは、現在はミネソタ大学の保管だが、近年まで日本にあった新出の原刊本を、その汚損まで忠実に写している事実から判明した。しかし、原刊本からの直接の模写が確実な事例は、現在、これら二点にとどまる。

刊行図については、従来、正保二（一六四五）年の万国総図が嚆矢とされてきた。しかし、詳細にみると、同じくマテオ＝リッチの作ではあるが、それとは別の両半球図に基づいていることがわかる。貞享五（一六八八）年の万国総界図も同様である。一七世紀中頃から約一世紀にわたって流布するこれらの世界図は、マテオ＝リッチの系統ではあるが、坤輿万国全図の系統ではない。従来、坤輿万国全図のみが想定されていたマテオ＝リッチ系世界図という類型は、両半球図系の第一次マテオ＝リッチ系世界図と、坤輿万国全図系の第二次マテオ＝リッチ系世界図とに峻別すべきである。

さて、坤輿万国全図の影響が刊行図に本格的に現れるのは、一八世紀末になる長久保赤水の地球万国山海輿地全図説である。これには重版、再刻版、さらには剽窃版なども あり、地方や庶民でも入手できたうえ、子供向けの図さえあって、社会各層に広く普及した。二百年近くも前の世界図に基づく図が普及した理由について、従来は、国際情勢の緊迫化と赤水個人の名声から説明された。しかし、いっそう重要な点は、古典を重んずる当時の思潮のなかで、知の淵源として、むしろ古いことにこそ価値が見出されていたことにある。前述した模写図がほとんど一八世紀末以降に成立をみることも、それと無関係ではない。

これを端的に示すのが、稲垣による享和二（一八〇二）年の坤輿全図の刊行である。同図は、複数の模写図の校合により、原典としての坤輿万国全図を忠実に翻刻することを目指したものである。しかも、地図の小型化と地名や注記の別冊化によって操作性を向上させ、さらに漢文の読み下し、地名のカナ表記、挿絵の掲載などの平易化も図っている。このような操作性や平易化に配慮した忠実な翻刻の刊行は、坤輿万国全図が古典の地位を獲得し、さらにその普及が求められていたことを意味する。

以上のように、坤輿万国全図の模写図については、原刊本からの模写はむしろ限られており、模写図から模写することがほとんどであった。その場合、地方知識人のネットワークの存在も無視できない。坤輿万国全図の普及において、原刊本にもまして、模写図がこのように写し継がれることの意義は大きい。

一方、このような模写の連鎖が続くなかで、刊行図が出現する。それを可能にしたのは、知の新規性よりも正統性を、科学主義よりも歴史主義を、革新よりも伝統を重んじる思潮であった。その結果、坤輿万国全図に淵源をもつ世界地理知識は、古典としての権威をもちつつも、同時に通俗化も図

られて広く普及する。こうして、近世後期の日本において、やがて来る近代国家の国民的教養を形成する基盤が準備されることになる。

近世日本における時間と空間

――『節用集』をめぐって――

横田冬彦

日本の庶民（百姓・町人）が、一定の空間的領域と歴史的時間をもつ〈日本〉という国家を、共通に認識するようになったのはいつからか。また、自らが生きる時間と空間を、日本という国家の空間と時間の中に位置づけて考えるようになったのは、どのようにしてか。ここでは、江戸時代の三つの出版物を素材にそのことを考えたい。

第一は、『節用集』。これは本来、室町時代に漢字用語辞書として始まるが、十七世紀＝近世に入ると、木版印刷による商業出版になり、語数は数千から一気に数万語に増加する。増大した語彙については、地名・人名などの固有名詞や具体的な事柄も多く、出版書肆は、少しでもわかりやすく、見やすいように整理・工夫するなかで、地名辞典や人名辞典、年表や地図などをさまざまな付録として追加し、それらは量的にも本体部分を越えるようになり、いわゆる百科事典のようになる。それらが定型化されていくのは、おおよそ元禄・享保期、十七世紀末～十八世紀前半である。

それらの付録は、結果として、日本という国家の空間的内容（領域）や、時間的内容（歴史）、政治的・文化的な内容（公武の国制の構造や伝統文化）を示すものとなる。これらは、できるだけ中立的網羅的に満遍なく、つまり辞書的に集積された知識として提示され、また、出版という均質な知識・情報として広まることになる。それは、人々が、書物を読んだり、演劇を観たり、諸事件の情報を得るとき、それがいつの時代の、どこの物語であり、どこで起こった事件かを理解できるような〈参照系の知〉として、人びとの常識・思考の枠組みを形成することになる。それは、近代国家の国民統合のような上からの権力的統合というものではなく、読者の関心に応え、よりよく売るための都市知識人と商業出版書肆との合作の結果であった。

しかし、けっして中立・無色透明というわけではない。たとえば、日本と中国とは対等に比較されるが、朝鮮はほとんど無視される、日本地図で琉球や蝦夷・朝鮮は半分だけ描かれる、年表は天皇歴代史として記載される、等々。

第二は、一七七〇年に出版された、軍書の総合目録『和漢軍書要覧』である。この頃には軍書（軍記物）・歴史書の刊行数は数百点に達しており、その簡便な目録が求められていた。凡例には、各軍書が対象としている「時代の前後を正し」、「時代の続きを理解させる」ことを編集方針として掲げ、最初に全時代通史的な年代記十七部をあげた後、個別軍書二百以上を西国から東国へと地域ごとに整理しつつ年代順に並べ、そして『信長記』『太閤記』等を経て、徳川による統一への流れに位置づけた。また、特に十三の主要軍書を選んで特別の番号を付け、その順に読めば「歴史の流れ」が簡便にわかると説明された。

こうしてさまざまな地域のさまざまな時代の小さな歴史は、日本通史という大きな物語の中に、時間的・空間的にその位置を与えられたのである。なお、『和漢軍書要覧』は一七七〇年の出版であるが、この十三点は『平家物語』『太平記』を除けば、

『前々太平記』『後太平記』などいずれも十七世紀後半～十八世紀前半に出版されたもので、すでにそうした通史的試みは出版書肆の側でも、また読者の側でも熟してきていた。

第三は、一八一五年に大坂の書肆宣英堂が出版した『万歴家内年鑑』。これは各頁に縦に五列の罫線を入れ、見開きでちょうど十年分とし、さらにそれを上下に区分して、上段には日本の国の歴史をあらかじめ印刷しておき、下段は空白になっていて、そこに書き込んでいけば、簡単に〈家の歴史〉ができあがるというものである。凡例では、歴代当主や家族の生没年から始めて、百姓ならば、土地を購入したり、蔵を建てたり、村役人になったりした年代、村の災害や飢饉、一揆などを記入していくなど、士農工商それぞれにどのようなことを書けばいいのかが示されている。実際にこれを使った事例として、江戸の旗本家、伊勢神宮の神主家、播磨の大庄屋、伊予の豪農、長門の遊女屋、信濃の本屋、福岡の儒者、近江の真宗寺院などが確認できる。日本の各地で、いろいろな身分の人が、国の歴史にも照応させながら〈家の歴史〉を書いたのである。

この簡便な出版物が出されたのは十九世紀初めであるが、その原型としては、十七世紀末の大坂周辺村落の村役人であった河内屋可正が、その息子に手書きさせた「河内屋年代記」を挙げることができる。白紙を綴じて冊子とし、まず各頁に三年ごとの年代を書き、上段には天皇や将軍、戦乱や領主交代など国家的な事柄が、中・下段には村・家・一族の事項を書き込んでいった「年代記」である。そこには、〈家や村の歴史〉を〈国の歴史〉との関連のもとに把握するような認識方法が生まれていた。可正は、祖父たちの苦労と困窮を戦乱の時代に重ね、今の時代の〈家〉の安定を戦後の泰平の世に対応させた歴史観を子に語る（『河内屋可正旧記』）。

以上三つの事例から、公家や寺家はともかく、ふつうの人々にとって、〈日本という国家〉の枠組みは決して最初から自明のものではなかったこと、十七世紀末～十八世紀前半頃に、人々は、自分たちが包摂されている〈日本という国家〉の領域空間と歴史的時間に満たされた大きな物語を、常識・参照軸として共有化し始めたことがわかる。それは江戸時代の出版文化を通じて広がり、少なくとも本土の人々は、自分たちの生きる生活や日常、あるいは自分たちがよく知るさまざまな伝説や記憶、家と地域の物語をその枠組の中において価値付け、再認識することをあたりまえのことと考えるようになったのである。

二〇一七年度史学研究会大会・総会の記録

二〇一七年度史学研究会大会・総会は、一一月二日（木）午後一時より、京都大学国際科学イノベーション棟五階シンポジウムホールにて開催された。

総会では、井谷鋼造理事長による挨拶の後、飯塚一幸氏を司会に選出して、庶務・編集・会計・広報に関する報告・審議がなされた。

庶務（小野沢透常務理事）からは、役員の交代および会員数の動向についての報告の後、四月二一日（土）午後一時より京大文学部第三講義室を会場として行う来年度の例会のテーマを「文明」とすることが報告された。

編集（中砂明徳常務理事）からは、『史林』刊行状況の説明の後、原稿が不足しているので、積極的な投稿をお願いしたいとの依頼があった。

会計（高嶋航常務理事）からは、二〇一六年度決算および二〇一七年度予算につい